

ブログ・アクセス百四十九万アクセス突破記念 梅崎春生 虹

「やぶちゃん注」本篇は初出不明で、昭和二三（一九四八）年八月に刊行した作品集「飢ゑの季節」（講談社）に収録されている。発表順配置の底本から、昭和二十二年と昭和二十三年一月発表の作品の間に置かれてあるから、編者は昭和二十二年中の発表或いは脱稿と判断したようである。因みに当時なら梅崎春生は満三十二歳である。

底本は昭和五九（一九八四）年沖積舎刊「梅崎春生全集第二巻」を用いた。ストイックに注を附した。

なお、本テキストは二〇〇六年五月十八日のニフティのブログ・アクセス解析開始以来、本ブログが昨夜、百四十九万アクセスを突破した記念として公開する。[ブログ横書版](#)もある。
【二〇二一年一月二十七日 藪野直史】

虹

サーカスを出ると、もはや巷ちまたは黄昏たそがれのいろであった。

先刻大天幕をひとしきり烈しく打つ雨の音がしていたがそれも通り過ぎたと見え、焼跡と凸凹地に処々わずかに水たまりを残しただけで、空は淡青く昏くれかかる風情であった。しかし焼残りの片側街をあるくとき、まだ家の廂ひだりからときどき水滴が豆電気をともしたように光っては落ちた。あのざわざわしたサーカスの雰囲気フムキのふしぎな後ナツハシユマツク、感がまだ身体の一部に残っていて、何となく甘い気特の中に麻醉から醒めて行くようないやな味が混り、私はうすく濡れた道に足を踏み入れる度に手にした洋傘を柔かい地面につき立てるようになるのだが、先に立って足早に歩く先生の幅広い肩がともすれば私と距離をつけそうになるのであった。「やぶちゃん注」後ナツハシユマツク、感「私は第一外国語がフランス語でドイツ語は全く分からないが、辞書だけは持っている（同学社一九七七年刊「新修ドイツ語辞典」）。しかし調べてみても、この綴りの単語は見当たらない。「ナツハ」は分離動詞の「前綴り」(Präfix)の「nach-」で、「後続・以後」の意を添えるから、それでよいとして、「シユマツク」が困った。ピツタリくる単語がない。ただ、目が止まったのは、動詞ではなく、名詞ではあるが、「Schmalz」(シユマルツ)で、俗語で「感傷」・「流行歌などの」お涙頂戴もの」といった意味が記されており、ネットで再確認すると、「プログレッシブ独和辞典」に、『ひどくセンチメンタルな気分』・『ひどくセンチメンタルな歌』とあった。「後に残る感傷」で親和性はある。動詞では「Schmerzen」(シユメルツェン)で「痛む・悲しませる」であり、その名詞「Schmerz」(シユメルツ)は近い感じはする。」

片側街が途切れると一面の廃墟がひろがり、黒い土蔵や立ち枯れた樹や散乱する瓦礫がれきのむこうに、郊外電車が小さく傾きながら土手の上を走った。そのあたりから夕陽の色を残す空にかけて巨大な虹が立っていた。地平のあたりは既に色褪あせてはいたが、中央のあたりのきらめく七彩は目も覚めるばかり鮮かであった。その虹をふたつに鋭く断る「やぶちゃん注」「たちきる」。焼焦げた電柱の根本に、女がひとり煉瓦に腰をおろしていた。先生の足がその

前で止った。

「どうしたんだね」

女は顔を上げた。色白の痩せぎすのくせに眼と眼が非常に離れていて、魚のように双眼でおのおの別の世界を眺めているように見えた。薄い外套を着て背をすくめ、しなやかそうなからだ軀が小刻みにふるえていた。

「寒いのよ」

「濡れてるじゃないか」

ほとんど顔の側面についた切れ長の眼の、長いまつ毛を二三度しばたいて、女は幽かすかに笑ったようである。

「雨が降るときは何処かに雨宿りするものだ」

「そんな親切なところははないのよ」

「洋傘は持たないのかね」

先生の後方一間「やぶちゃん注…三メートル」程の位置に立ち止り、私は女の唇の動きを眺めていた。女は口紅はつけていなかった。白く乾いた唇だった。先生の言い方が真面目なので、ふと女は驚いたような目付になった。

「日が暮れるから家へお帰り。おなかもすいているんだらう」

「おなかもすいてるわ」女はのろのろと立ち上った。「洋傘も持たないんです」

視野の中で虹は急速に頰くすれて行くらしかった。女の顔は空を背にしているせいかな非常に蒼白く見えた。先生が私の方に振返った。鉄縁の眼鏡の奥にある眼は何か過剰な光を帯び蒼黒い頬が思い詰めたように痙攣した。先生の此のような表情は私はあまり好まないのである。

「君の洋傘を貸し給え」

私は気持の抵抗を少し感じながら、それでも洋傘を差し出した。受取って先生は女の方にむき直った。

「これをあげよう」

女はじつと先生の顔を眺めているので、双の瞳が心持中央に寄り、眇すがめに似た印象であった。仏蘭西フランスのどの画家かの絵の女に似ていると思ったが、それは鳥獣魚介が持たぬ人間だけにある、あの奇体なまなましい魅惑であった。私は思わず女の表情に心を奪われていた。女はほっと肩を落した。

「いただきますわ」

私の方をちらと見ながら、洋傘の曲った柄のところを腕にかけた。そしてはつきりした声で言った。

「おなかもすいている」

先生は黙って手をポケットに入れた。広い背中表情が妙に淋しそうであった。四五枚の紙幣を取り出した。

「此の道をずっと戻ると右側に、丹吉という飲屋がある。あそこの煮込みを食べなさい。金が足りなかったら、あとで先生が払うとおやじに言うんだ」

女は紙幣を受取りながらはにかんだように笑いかけたが、すぐ止めた。洋傘をぶらんぶら

んさせて歩き出した。「やぶちゃん注…「笑いかけたが」は行末で読点がないが、補った。」

「ありがたい人ね」

まだサーカスは終わらないのだろう。破れた太鼓や急速調の笛の音が風に乗って幽かに流れて来た。凸凹道を器用に歩いて行く女の後姿を眺めながら、女が素足のままであることにその時私は気がついた。

「あれはいくつ位になるのだろう」

歩き出していた先生を追って肩を並べた時、先生は沈んだ調子でそう言った。

焼跡のまま道が二叉にわかれるところで、私は立ち止って帽子を取った。私はこれから右の方に駅に行くのである。先生の家はここから十分ばかり、焼跡にただ一軒残った小さな二階屋であった。そこに奥さんと二人で住んでいた。先生も立ち止った。

「翻訳の方は二三日中に出来上ると思います。出来たらお届けします」

「何時でもいいんだよ」

と先生は言った。そして眼鏡をきらりと反射させながら身体の向きを変え、低い声で口早に言った。「やぶちゃん注…底本には最後の句点がないが、補った。」

「——金が無くなったら、僕の家に来給え。傘も買い直したらいいだろう。女房にそう話して置くから——」

言っているうちに言葉が曇って来るように思われたが、先生はすでに身体を揺るようにして道を歩き出してした。

家に戻った時はもう暗かった。玄関はしまっていて、貫さんはまだ帰っていないらしかった。私は裏口から入り自分の部屋におおむけに寝ころんだ。畳の冷えがしんと軀からだに伝わって来る。あの物悲しいジンタの旋律が連関もなく身内によりみがえって来た。「やぶちゃん注…「貫さん」「かんさん」と読んでおく。「ジンタ」明治中期に本邦で生まれた民間宣伝の市中音楽隊。その愛称は大正初期につけられた。」

外ではぼうぼうと風が吹き、通り雨が走ったりしているのに、大天幕の内部はあかるくて、粗末な木組の舞台ではつぎつぎ妖あやしい演技が続けられて行った。客席の一番外側の通路に私と先生は立っているから、キャンバスのひとえ向うは連なった闇市で、ジンタが途切れると飴売りや蜜柑をせる声が私達の耳まで届いて来るのだ。足芸、はしご乗り、水芸、奇術。どの演技者もつきつめた表情であった。絶えず笑いを浮べようとしていたけれども、それはおそろしく堅く真面目なわらいだった。どういふ訳か自分が次第に憂鬱うげつになって行くのを、番組が進行するにつれて私は感じ始めていた。

——舞台上に銀線をいっぼん張り、裾模様を着た女が日傘をかざして渡って行った。足を踏みかえる度に黒く汚れた足袋たびの裏が見えた。そう思えば裾模様も色褪くたせて草臥たびれていることが遠目にも伺われた。裾が乱れるとその下に青い洋袴をはいているのが見える。インキのような厭いやな色だった。銀線の下には男がいて、ヤッ、はッ、と掛声をかける。急速な三味線の音のなかで、女は銀線の上に平均を取りながら着物を脱いで見せるというのらしかった。左右に揺れながら女は帯じめを解き、そして長いことかかって帯を解いた。そういう手先や身体からだのこなしと関係なく、眼だけはぎらぎらと光りながら宙に固定していた。身体中から紐ひもが

全部落ちたとき、女は着物の胸を押え、ふっと顔を観客席にむけた。そして笑ったのだ。――思わず私は眼をつむった。それは笑いではなかったのだ。必死になって顔の表情をくずそうとする風情だった。見るべからざるものを見たような厭な気持で、私は無意識に後ろに組んだ指を力こめて握っていたのだが、拍手と一緒に眼をあげた時は、女は既に舞台上に飛び降りて花模様の上衣と青い洋袴の身軽な姿で、あたり前の笑い顔をしながら拍手に挨拶をかえしていた。もはやそれはごく平凡な少女に過ぎなかった。……「やぶちゃん注：「裾模様」和服の模様付けの一種で、裾にのみ配された模様、或いは、その模様のある着物。女性の礼装用で「総模様」（女性の和服で全体に施されるもの或いはその模様のある着物）に対する語。」

背中が冷えるので私は起き上った。部屋の中には紙屑や塵埃が散乱し、机の上には原書や辞書が不規則に並んでいる。宵のうちは電力が衰えているから辞書の小さな字は読めないのだ。しかし私は翻訳の仕事は情熱をすっかり失っていた。復員して来て――大陸から南方へ六年間、私はブウゲンビル島から帰って来た。そして今迄、私は先生の翻訳の下請けなどして生活して来た。食うや食わずであるけれども、閨屋にまでおちたくないという小市民的な気持が辛うじて私の日常を支えて来た。そして間接的だけでも学問に関係しているという喜びに私はすがっていた。しかしそういう気持の高揚の瞬間にすら私は自分の心の中に壁みたいなものを感じていて、壁のむこうが真実の自分ではないかとふと疑われて来るのであった。所詮はそれも生活の苦しさから来るのではないかと考えもするのだが、それも判然としなかった。しないままに私は翻訳にずるずると興味を失って来たようである。「やぶちゃん注：「ブウゲンビル島」パプアニューギニア・ブーゲンビル自治州の**ブーゲンビル島** (Bougainville Island)：グーグル・マップ・データ)。太平洋戦争中の長期激戦の一つ「ブーゲンビル島の戦い」で知られ、梅崎春生には、それを扱った小説「B島風物誌」があり、既に本カテゴリー「梅崎春生」の**ブログ分割版**及び**PDF一括縦書版**を公開済みである。」

暫くして玄関をがたがた言わせて貫さんが戻って来た。リュックサックの中に死んだ鶏が五羽も入っていた。私は上り框かまちに立って、土間で貫さんが鶏の死骸を引き出すのを見ていた。

「これをバラすんだよ。それから売るのがさ」

「どこに売るんだね」

「どこにでも売れるさ」貫さんは明るい顔を私にむけた。

「バラして売れば三倍につくんだよ」

蜜柑箱みかんをまないた代りにして、貫さんは器用な手付で庖丁を使った。毛穴のぶつぶつした皮や肉の薄い骨を巧みに剥がして、赤い身のところどころに走る黄色い脂肪を丹念にえぐって皿により分けた。鶏は薄黝うすずらく臉を閉じてくびを台から外に垂れていた。乏しい電燈の下であったけれども、肉の色は生き生きと美しかった。貫さんの庖丁が台に当ってカタカタと鳴った。

どういう聯想かは知らないが、私は先刻焼跡で見た巨大な虹のことを思い浮べていたのである。私は柱によりかかり足の踵をも一方の足の甲に重ね、ふしぎな慄えを感じながら解体されて行く鶏身の彩りに見入っていた。断ち落された黄色い粒々の脚が、無念げに足指を曲げて土間に何本もころがった。次々新しく断ち落される毎に、私は追われる者のように首

を立てて四辺を見廻していた。

持つて帰った分だけはどうにか翻訳し終ったので、私は原稿を揃えて先生の家を持って行った。焼跡の畠は麦もやや伸びて季節も暖気にむかう気配があった。入口を入ろうとしたとたん、玄関から黒く光る洋服を着た奥さんが出て来た。

「あ、ちょっと」

奥さんは小さな声でそう言いながら、冷たい感じのする視線で私の顔を見て引返そうとしたが、そのまま思い直したらしく頭をわずか傾けて急ぎ足で門の外へ出て行った。半顔の傷痕が私の視野をちよつとかすめて消えた。

先生は階段下の三畳の部屋に鬱然とすわっていた。

「今朝から痔が痛いのだ」

厚い座布団の上で膝を組みかえながら先生はそう言った。

私は風呂敷を解いて原稿を差出した。先生がそれをばらばらめくる間、膝の上に手をのせて私はじっとしていた。翻訳の仕事をこれ以上やりたくないこと、それをどんな風に切り出そうかと考えた。此の三畳の部屋は私は始めてであった。北向きらしく日の射さない、何だか畳が濡れて白くふやけているようだった。部屋のすみの畳の縁に、丸くふくれたポタンのようなものが二つ並んで落ちていた。じっと見るとそれはボタンではなくて、黄色い小さな茸きのこらしかった。先生が顔を上げて原稿を机の上に押しやった。鉄縁の眼鏡の奥に羊のような暖かい眼があった。

「君、丹吉に行こう」「やぶちゃん注：「にきち」と読んでおく。」

私が何も言う暇もなく先生は立ち上っていた。

空は良く晴れていた。午後の陽が先生の二重まわしの背にあたり、並んで歩く私の鼻に毛の匂いがした。焼跡に一

本残る電柱のところまで来たとき、先生はややゆっくりし

た足どりになって話し出した。「やぶちゃん注：「二重まわし」「二重廻し」。二袖の無いケープ付きの外套。男性用のインヴェネス (Inveness coat) のこと。ホームズが好んで着用するあれである。」

「此の間此処に変な女がいただろう。あれは僕が昔知っていた女に感じがそっくりだったんだ。その女も生きてるか死んだか、生きてても僕と同じ位の歳なんだがね。一寸見た時その女じゃないかと思っただ位なんだ。馬鹿げた話なんだが、でも近づいて見ると矢張り違っていた。ずいぶん眼と眼の距離がある娘さんだったな。あんな顔は九州の山奥に行くときよくあるよ——」

焼跡が尽きると片側街となり、やがて幽かにジンタの音が聞え出した。ぽつぽつと新しい家もまじって風船売りなどが路ばたに店をひろげていた。丹吉はその辺の露地の入口にあった。此の店へは先生に連れられて何度も来た。立てつけの悪い油障子を引きずりあけて私達は内に入った。「やぶちゃん注：「油障子」雨などを防ぐため油紙を張った障子。強い黄褐色を呈する。」

此の飲屋丹吉は私の知っている範囲では奇妙な飲屋のようであった。主は年の頃五十近くの分別あり気な頑丈なおやじであるが、これが勘定の点になるととたんに出鱈目でたらめになる。焼酎二三杯しか飲まないお客から二百円余りも取ったり、五六杯飲んでも百円程で済むこ

ともある。焼酎一杯がいくら肴さかな一品がいくらという単価の観念がてんで無いらしく、勘定というのは私の見るところでは彼の心に湧く漠然たる印象によるものらしかった。昔船乗りをやっていたという男で、二の腕に刺青など彫っているが、焼酎はいい焼酎を飲ませた。

「やあ、おいで。先生」

こう書くときまことに晴れやかな挨拶だが、おやじの顔はまことに物々しく声音「やぶちゃん注：「こわね。」はむしろ沈重であった。重たげ臉をゆっくり上げて油断なげに私達をじろりと見るが、暫く通しばらっていると油断だらけだということがすぐ判って来るのである。

煮込みを注文して私達は焼酎を傾けた。傾けながら先生は二重まわしのかくしから紙幣入れを取り出した。

「今日持って来た分だね」

私は四五枚の大きな紙幣を受取った。このような瞬間に私は必ず気持の抵抗を感じるのだ。私が今日たずさえた原稿がすぐ先生を通じて金になる訳ではない。またあれが役に立つのかどうかも私は知らないのだ。私に判っていることは、邦訳した枚数だけを先生が金に換算して呉れるだけである。私の仕事の成行きは宙で断たれている。そのことから私は強い眼を閉じているものの、次第に近頃先生の柔かい好意が鎖のように重苦しく思われて来るのであった。

向い合って焼酎を黙って飲んでいると、やがてほのぼのと酔いが廻って来る様子であった。卓に肱ひじをついて先生が話しかげた。

「下請けは縁の下ひもとの力持だからね、いい加減いやだろう。そのうちにちゃんとした仕事を出版屋から廻させるよ」

「私はいいです」

「いいたって君、やはり生活して行かなければならないのだろう」

「ほんとにいいのです。先生」

怒ったような口調だったかも知れない。先生は不審げな一瞥いちべつを私にそそいだが、直ぐ卓を叩いてお代りを注文した。少し廻ってぼんやりした頭で、私は貫さんのことを考えていたのだ。貫さんは私の戦友である。部屋が無いから私が転がり込んだ形だが、貫さんは厭な顔もせず私を入れて呉れた。此の間の鶏を彼は山梨県から運んで来たのだ。誰の援助も借りず彼は独りで運んで来て、そしてそれを売った。鶏を解体している時の自信に満ちた手付を、私は今、酔いのためなおのこと灼けるような羨望の念をもって想い出していた。それはなにか痛苦を伴うので、私は頭をはげしく振ってそれを意識の外に追い出そうとした。新しいコップを傾けながら、私達はあのサーカスのことなどを話し合っていた。「やぶちゃん注：「私は今、酔いのため」の「今」は行末で読点はないが、補った。」

「芸を持っていて強いことは強いな」と先生が言った。

「彼等は皆ひたむきな顔をしているだろう。他の何物をも信じていないのだよ。自分の技倆だけを信じているんだ」

「人間はしかし誰でも何か自分を信じなければ生きて行けないでしょう」

「そうだよ。だが自分のものを徹底的に信じ切れるかどうかが分れ目になるんだ」

薄い日射しが油障子に当って、客はまだ私達だけであった。調理台の向うでおやじが、ぐ

ふんと沈鬱なせきをした。風の加減でサーカスの音楽が断れ断れに耳に届く。油障子を表から押すらしくカタリと鳴ったが、そして軋んで開かれた入口から灰色の外套を着た女が入って来た。私は思わず眼を挙げた。それは此の間電柱の元にうづくまっていたあの女であった。女も私達に気付いて短い叫び声を立てた。

「此の間のおじさん達なのね」女は卓に近づきながら皓い歯並みを見せてわらった。「そして飲んでるのね」

光を背にしているから直ぐ判り難かったが、卓の側まで来たとき先生もそれと認めたらしかった。

「飲んでいるさ。おすわり。あの時の娘さんだね。此の間は煮込み食べたかい」

先生は二重廻しの袖をはねて椅子を引寄せた。呂律は少し乱れていたが、先生の眼は何か強くさだまるような感じであった。それよりも私は女の、遠い処ばかり眺め続けて来た人の眼のような瞳を、ひき入れられるように眺めていた。気が付くと薄くではあったが唇の内側に女は紅をさしていた。女は私の視線に気付くと、居を結ぶようにして堅い顔になった。

「煮込みなんか食べなかつた」椅子に腰をおろした。「わたしあのととき焼酎のんだのよ」

先生は一寸驚いたような顔をして瞳を定めたが、すぐ眼元が柔かく崩れて来るらしかった。

「じゃ今日も焼酎飲み給え」

おやじが侍従武官のような顔をして焼酎を新しく持って来た。置かれたコップに唇を持って行こうとして、女はふと頭を上げて首を反らした。両掌を外套から出して卓の上にきちんと重ねて揃えた。硬ぼつた微笑が女の頬に突然のぼって来たのである。それはサーカスの銀線上の女曲芸師の、着物を脱ぎ捨てようとする瞬間のあの笑い顔にふしぎにそっくりだったのだ。

「私はどんな女か知ってるの？」

少しうわずった声でうたうように女は言った。先生は口まで特って行ったコップをまた卓の上に戻した。

「知っているさ。此の間洋傘を持たないで困っていた娘さんだろう。そして今日此処でまた会ったのさ。それでいいじゃないか」

「私パンパンよ」女は低いけれどもはっきりした声で言っじつと先生を見つめた。此の女はものを見詰める時に、あの不思議なまなましい魅力を顔中にたたえて来るのであった。

「わたしパンパンなのよ。それでもよくって？」

「いいとも。何故そんなことを気にするんだ」

私はそう思わず口走った。女は私に視線をうつした。幾分なごんだ調子になった。

「――此の間の洋傘は確かに貴方のね。そのうちお返しするわ」

「返さなくてもいいよ」

「でも悪いわ」

そして女はコップを持ち上げて一口二口飲んだ。外套の手首の擦れを、私は女の視線からそっと卓の下に隠していた。此の女をもっと知りたい気持が酔いにたすけられて募った。

「名前は何というの」と私は聞いた。先生がそのとき横合いから口を出した。

「ぼくが名前をつけてやる。花子」

身体をよじって女は苦しそうに笑い出したが、直ぐ焼酎にむせて烈しくせきこんだ。「やぶちゃん注」：「パンパン」売春婦。特に第二次世界大戦後の日本で、駐留軍兵士相手の街娼を称した。「パンパンガール」「パン助」。意外なことに原語は未詳である。語源説はウィキの「パンパン」に九件載る。」

その日はとうとう酩酊のことは話さずじまいであった。泥酔した先生を、お宅まで届け家に戻って来たのは九時過ぎだった。布団をふかぶかと顎まで掛けて私は花子のことを考えていた。酔いがまだ残っているので身体が布団ごと深淵に落ちて行くような気がした。先生を送って行く途中、焼跡の電信柱に先生をつかまらせ、私は一緒について来た花子を抱いて烈しく接吻した。それから花子は何処に行ったか判らない。私も酔っていたからそのときの気持は定かでないし、はき散らした言葉の数々も覚えていない。私は二十八歳。二十八歳であることが強く頭に来た。私は女を知らない。兵隊であったときも愚直な潔癖から私は頑固に女を退けて来た。しかし今、自分が未だ童貞であるということが何か不潔にいとわしいものに感じられて来るのであった。

その夜は暖かであったが、翌日からまた薄ら寒い日がつづいた。一日中部屋にいて原稿のかきかけを整理したり、部屋を綺麗に掃除して身の廻りを整頓したりした。すっかり整頓し終ってもまだ何だか落着かぬ気がした。以後酩酊の下請けを断るということは、私の僅かな月々の定収入を失うことであった。貫さんに対しても私は一度も部屋代は払わないし、むしろ逆に御馳走によべれたりする方が多かった。私はそんなとき貫さんに憐れまれている自分が判った。私は憐れまれるより邪魔者扱いされた方がいいと時に強く思ったが、邪魔者視されればまた途方に暮れるにきまつていた。貫さんが何処からか物資を仕入れて来て、それを鮮かにさばく手際を、私は見えないようにしながらしかし羨望の思いを禁じ得ないのだ。その羨望の念に、貫さんに対する紛れもない憎しみがまじっているのを意識していた。しかしその憎しみはすぐさま私自身に鋭くはね返って来た。闇屋にすらなれない、そんな意識が私を苦しめた。

寒い日が二三日続くとまた暖くなった。気分を変えるために私は外出の用意をした。先生の家に行くかと思ったが、それを押えるものがあって、私はあのサーカスの近くの闇市をぼんやり歩いていた。外套を着ていると背筋が汗ばむほどだった。

色んな露店を眺め歩いているうちに、私は私も近いうちに此のような人々に混って荒くれたかけ引きをするようになるのではないかとふと思った。私が闇屋にならなかつたのは私の小市民的な虚栄に過ぎないことが近頃私には判り出していた。私はそれを自分の人間的な矜持きんぢと思っていたのだが、やはり金がほしくてうずうずしている癖に闇屋をさげすんでいる勤め人や学者と知合いになるにつけ、私ははつきりと私の醜悪な像を彼等の中に見たのだ。学問に関係がある仕事、酩酊の下請けをそう考えることが自分への胡麻化ごまかしであることは、とうに気付いていた。贖にせの感情の上でなく、自分の力の上で生きて行く生活を私は近頃切に欲する気持になっていた。それが私が先生から離れたく思う一つの原因であった。法をくぐる闇屋の方が、他人の温情に寄生するより生甲斐があると思った。しかしその頭では思っても私はぐずぐずと踏切りがつかないものであった。所詮は生活の感傷に

過ぎないのかも知れなかった。

露店の列は一町「やぶちゃん注…百九メートル。」程で尽きる。道が乾いているので土埃がうつすら立ち、魚屋の前あたりが人混みがことに多かった。少し離れて、レグホンの黄色い雛を蜜柑箱に入れて売っているぼんやりした老人もいた。露店の尽きる処に灰色の天幕をぶわぶわとふくらませたサーカスがあった。破れた喇叭が濁った空気になり渡った。

入口の上が二階に作られ、そこが踊子達の衣装の着換え場所になっていて、華美な着物が裏を見せて掛けられていたりした。屯している踊子や曲芸師は、それを眺める群集の視線に無関心に稚なく動く風であった。脚をおおう白いタイトの膝裏のよごれが、変に肉感をそそった。外套のポケットに手をつっこんだまま私が眺めていると、誰かひそかに横に立つ気配がし、私が振り向くと同時に軽く身体をぶっつけて来た。花子ではないか、と私が驚くと花子はなおも身体をぶっつけて来ながら明るく笑い出した。

「何をぼんやり見てるのよ」

今日は外套を着ていず、青い上衣を着ていた。唇には可成り濃く紅を入れていたが白日の下でもさほど不自然ではなかった。花子の顔は化粧すれば不自然になるものと私は漠然と思ひ込んでいたのであったけれども。

私達は肩を並べて人混みを抜けて駅の方に歩き、近頃出来たらしい喫茶店に入った。甘酒を飲みながらサーカスの話などした。上衣の袖が短くてほっそりした手首が出ていたが、花子はしきりにそれを気にして引っぱるようにした。

「あれからどう暮していたの？」

話が一寸途切れ、それを埋めるために私は何と無くそう話しかけた。今日は天気が良かったし花子が気持の上で私に倚りかかって来るように感じられるので、私も明るく和む気持であった。しかし私がそう聞いた時、花子は瞳を伏せて一寸暗い顔をした。

「どうって、どんな意味なの」

「暮しのことさ」

「暮しは辛いわ。昨日も外套売ったわ」

外套なんか売らなくても誰か男から金を貰えば良いではないかと、私は言おうとしかけ、花子のはげしい視線にたじろいで口をつぐんだ。花子は真直に私を見ていた。真剣な顔をするとき花子はこんなに美しいのだと、私は胸をつかれるような気がした。

「私をパンパンだと思っているのね」

「そんなこと言いはしないよ」

「しなくても顔に書いてあるわ」花子は卓に身体を寄せて顔を近づけた。「あたしはまだパンパンじゃ無い。でももう食えないからパンパンになるのよ。でも今はまだそうじゃない」花子は身体をもむようにして私を見上げた。押え切れないような哀憐の情が俄に私の胸にあふれて来たのである。手を伸ばして卓の上の手袋をつけた花子の手に触れた。

「此の間の晩だって、あたしをパンパンだと思うから抱いたんでしょ」

あの夜の接吻のことを言っているのに違いなかった。私が黙っていると花子は私の指を手の中に入れて押つけるようにした。

「私は墮落したくない。ほんとにパンパンになりたくない。どうしたらいいのかしら。ねえ、

どうしたらいいの、教えて。お願い」

身体を硬くして私はじっとしていた。酔っていたせいもあるだろうが、あの接吻のとき私は責任や気持の抵抗を全然感じていなかったのだ。私は、パンパンだと言った花子の丹吉での言葉が、私に安々とそんな行動を取らせたことは否めないにしても、花子の脆い美しさが私の一方的な愛憐をそそったという外はない。しかし未だ花子が娼婦でないとすれば、あの夜の位置も私の心の中でおのずと変って来る筈であった。花子は手中を出して眼縁「やぶちやん注：「まぶた」と読んでおく。」を拭いた。しかし私は今此の女に何をしてやれるというのだろうか。

「では何故丹吉で自分をそんな風にいったんだね」

「——あなたがたを良い人たちだと思ったの。だからわたしみたいな女が側にすわるのが悪いような気がしたの」

「洋傘をあげたから？」

「でもあの日は私はパンパンになるつもりだった。電柱の下で通る男を呼び止めようと思つて待つてたの」

「洋傘を上げたのは僕じゃない。あれは先生だ」

花子はふと白けた乾いた眼付になって私を見返したが、一寸間を置いて、

「あるとき先生は何故私に洋傘を呉れたの？」

「君が濡れて寒そうだったからさ」

「ひとが濡れてたら先生は誰にでも洋傘をやるの？」

「先生はそういう人なんだよ」

「そうかしら。そんな人もいるのかしら。しかしそれで良いのかしら」

私が返事をしないでいると、花子は脇ひじを卓について私を睨むようにしながら言った。

「あなたの眼はいい眼ね。あなたもきっと良い人ね」

何故かは知らないけれど、私は此のとき非常に苦痛に似た感じに胸がふさがって来るような気がした。私は思わず眼を花子から外らしながら、低い声で呟くように言った。

「もし思いに余るようなことがあつたら、先生のところにご相談に行きなさい。あの人は良い人だ。身体を落さなくても済むように、きっと先生はして呉れると僕は思う」

「私は真面目な仕事につきたいの」

「先生の奥さんは顔があちこち広いという話だから——」先生がそんなことを言っていたような気がするだけで私に確信がある訳ではなかった。だから私は追われるように視線を乱しながら。

「だから良い仕事があるだろうと僕は思う。きっと幸福になれる——」

君は幸福になれると言ったことが、一時逃れの胡麻じま化まかしであったような気がして、花子とその日別れて後からも私は不快であった。そして此のような偽りを口にしなければならぬのも、すべて私の生活の悪さから来ていると私は思った。嫌悪が二重にかさなった。

しかし私には良く判らない部分が花子にあったのだ。前二回と異なり、その日は可成親近な感情でいた筈だけれども、別れてあと花子の言葉や動作を思い浮べようとすると何だか

嘘のようにまとまりがなく印象が散乱する感じであった。ただ花子が思い詰めたような表情をするときのあのなまなましい感じが、私の肉体を貫くような激しさで私の情感に訴えて来るのであった。(何故あの夜花子は素直に抱かれて私に唇を接して来たのである)花子の言葉が本当とすれば、あの夜もまだ花子は男を知らない筈であった。自分を娼婦だと思いうからこそ抱いたのだろうと、花子は一寸非難めいたことを口にしたが、唇を許したその気持については彼女は何も触れなかったのだ。判らないままにあの夜の行為に対する償いが、鈍く私の胸をおしつけて来ることを感じていた。現在の生活的な不安もあって、それは取りかえしのつかぬ過失のような気にも時々なったが、私はずるくその気特から逃げていた。

先生から先日貰った金は既に大半費い尽したし、新しく金を得るためにはまた何か売るでもしなければならなかった。貫さんは山梨県に二三日泊りで出かけたから、家には私一人だった。先生の処にまた翻譯の仕事を頼みに行こうかと心弱くも考えているうちに先生から葉書が来た。

近頃どうしているかということ、翻譯の仕事があるから取りに来るようになるところが書かれてあった。それを読んだ時、先日丹吉で先生が自分を信じ切れるか否かが人間としての分れ目であるといった言葉を私は思い出した。生活への信念の不足が私を今苦しめていることを考え、そして先生はあのような自分の善意を徹底的に信じているのだろうかと思つた。先生の好意や善意を勿論疑う訳ではなかったが、善意を発するに当って先生は全然傷ついていず、傷ついているのはむしろ好意を受けている私であることを考えれば、善意の形式というものをふと訝る気にもなるのであった。そんな先生の善意へたよるように私があの日花子に勧めたことが、私は取りかえしのつかぬ失敗だったような気がした。しかし先生の葉書を黙殺する程の強気にもなれなくて私は出かけて行つた。

傾いた玄関に入って案内を乞うと先生は丹前を着たまま出て来た。近頃どうしてたんだと笑いながら言った。その声を聞くと私は先生に対する反撥が何か跡かたもないもののようにも思われて来るのであった。私も帽子を取って素直に挨拶出来た。

階段下の三畳の部屋にすわると直ぐ先生が思い出したように言った。

「先日花子が私の家に来たらしいよ」

「お逢いにならなかったのですか」

「僕はいなかった。女房に会つたらしいのだ。何か職につきたいという話だったらしいのだが、どうして僕の処に訪ねて来たんだらう」

花子にそうしろと言つたことを私は先生に話した。先生の表情は曇っていた。

「女房はそれについて何か誤解しているらしいんだ。花子とどういう応対したのか知らないが、あの女房のことだから少し気になる」

私は奥さんのことを思い浮べていた。恰幅の良い身体に何時も黒く光る服を着て、顔半分は焼傷「やぶちゃん注」やけど」と読んでおく。」の痕で茶色にひきつれていた。そのせいで眼だけがキラキラ光るように思え。戦争に行く前私が知っていた奥さんとは別人のような感じだった。前はおとなしそうな感じの人であった。此の奥さんと花子がどんな会話をしたのかと私は少し心配になって来た。

「四辺が皆燃えてしまって、此の家一軒が燃え残った」先生は両手を拡げて燃え尽きた形容

をした。「翌日焼け残った此の家を見たとき俺の家はこんな奇妙な形かと思つたよ。今までは他の家にはさまれて、言わば安心していたんだ。処が周囲が焼けてしまったもんだから、変な形のまま一軒で立つて行かねばならなくなつたんだね。風にもさらされるしき。女房の性格が變つて来たのが丁度此の頃からだよ。俄に荒々しく烈しくなつて来たよ。それまでは僕をたよりにしていたらしいんだが、そのとき以来何か顔の皮をわぎと寒い風の方にねじむけて進んで行くような生き方を始めたんだ」

しゃべっているうちに先生の声は段々沈鬱な響きを帯びて来た。

「周囲が燃え熾つて来たとき、もう駄目だと思つたからぼくは逃げようと思つたんだ。無茶苦茶に煙は来るしね。家を守るより生命を守る方が大事だと考えた。煙に巻かれながら、逃げようと僕が叫んだら、女房は必死になつて僕にすがりついて来たんだ。家を燃したくないというんだ。家どころの騒ぎかと僕が怒鳴つて争っているうちに、焰のために身が熱くなるしき、どういふ具合でそうなったのか覚えていないが、僕は女房を地面に突き倒していた。二三次なぐりつけたようにも思う。そして煙の中を一所懸命奔つて逃げた。――翌朝僕が戻つて来たなら、まだぶすぶす燻っている焼跡に、嘘のように僕の家だけが不思議な形をして残っていた。僕は何か言いようのない荒涼たる気持になつて玄關の扉をあけたら僕はぎよつとした。顔の半分は焼けただけだ女房が片手にしっかり火たたきを握つたまま、じつとわずくまっていたんだ。そして残つた方の眼で僕をじろりと見たきり、何にも言わなかつた。ほんとに何も言わなかつた」

先生は苦しうに眼を二三度閉じたりあけたりした。

「その日以来き、女房が變つたのは。あれが僕を憎んでいるのかどうか僕は知らない。そんなことをあれは何にも言わないのだ。言わないから僕も聞かない」

うつむいた先生の髪にまじつた白い毛が佗しく眼に映つた。

「――ぼくは他人に自分を捨てても親切にしようと思つたんだ。善意だけで他人に対しようと思つた。贖罪という気持じゃない。ただ何となくそういう気持になつたんだ。それ以外には生きて行く途はない。その日以来毎日僕は自分に言い聞かせつづけて来たんだが……」

あとの方は独言のような調子に低くなつて来た。そしてそのまま黙つてしまった。先生をいたわりたい気持と反撥する気持が私の胸に交錯していて、私は膝を乗り出すようにして言つた。

「しかし――先生の善意は、何か無責任な気がします」

「何放？」先生は顔を上げてするどい眼付をした。私は駆られるように口走っていた。「やぶちゃん注…「駆られる」「かられる」。

「先生の善意は恣意みたいな気がします。僕は過剰な責任のない善意は、悪意と同じだと思ひます」

私の言葉を先生は聞いているのか、先生の表情は堅く動かなかった。暫くして低い声で言つた。

「ぼくがかかえてやろうと言うのに、女房はそれを振り切つて、半顔は焼けただれたまま自分であるいて病院に行つたんだ。病院に着くまでの道のりを、あれが何を考へて歩いたかと

思うと、僕は今でもじっとしていられないような気がして来る——」

翻訳の仕事が私に渡そうとしたとき、私は気持の上からでは絶対に断るつもりでいた。二三次押問答しているうちに先生が、では君は外ほかに生活するあてがあるのか、と聞いた。私が答えかねて黙っていると、先生は更に重ねて言った。

「君は何か思い違いをしてやしないか。君が翻訳をやって呉れるので、僕は大変たすかっているのだ」

先生の頬は少し瘻けいれんし、眼に過剰な光があふれていた。先生は時々こんな表情をする。花子に洋傘をやったときも先生はこんな顔で私を振返ったのだが、私は此のようなときの先生を好きでないのだ。先生の言葉が嘘であることは直感的に頭に來た。それにも拘らず私は気弱く翻訳原文を受取っていた。

早春の嵐が土埃つちぼろをまいて、焼土の跡をぼうぼうと吹いていた。

手巾ハンカチで鼻をおさえて道を戻って行く途中、鬱屈した気分堪えかねて私は無意識のうちに歩みをサーカスのある街に向けていた。そして気が付くと私は丹吉の露地に立っていた。胸の中で計算してみると少し位飲む程度の金はまだ持っていた。しかし使い果すと明日から困る金でもあった。ためらう気持を駆るものがあつて、立て付けの悪い油障子を私は引きあげた。

煮込みの鍋をかきまわしていたおやじが、垂れ下った臉を引っぱり上げてじろりと私を見た。

卓よに倚よつて焼酎を傾かけているうちに、やがてせき止められていたものが快よく流れ出すような気がした。先生のこと生活のことも、何もかも虚しい別世界を吹く風の音のようであった。焼酎が咽喉のどを流れ落ちる熱感だけを、私はむさぼるように欲しつづけた。肩を椅子の背に落し、何杯もコップを重ね、煮込みの堅い肉を奥歯で噛んだ。汚れた壁に張られたポスタアの女を見ていると突然花子のことが私の胸に浮んで來た。調理台のむこうにつくねんとしているおやじに私は話しかけた。

「花子は近頃来るかね」

「二三日前來たよ」そっけ無い調子でおやじが答えた。

「何か言つてたかい」

「何も特別言いやしないけれど、焼酎を沢山飲んで、その揚句泣いたよ」

「泣いたつて、何故だろう」

泣いていたという言葉を聞いただけで、花子のあの思い詰めた表情の美しさが私の眼底にきらめき渡るような気がし、私は胸が詰まるような心持がした。酔いの感傷であるとも思つたが、私は半ば身体をおやじの方に向け、むしろなじるような調子で詰め寄つて行つた。

「何故だろう。何故泣いたりしたんだろう」

「職を頼みに行つて断られたからだよ」

おやじの断片的な言葉をいろいろ追窮して、大体私は想像出來た。あれから花子は奥さんに逢つたのだ。そして奥さんから逆に、何処で先生と知合つたのか、今何を職業にしているかということなどを問い詰められて、あるいはその揚句あげく面罵めんばに近い応接を受けたのに違ひ

なかった。

「こう言ってたよ。職業は何だいとしつこく聞くから、パンパンだと言ってた」

奥さんの冷たい視線が、ぎよっとする程鮮かに脳裏に浮び上って来た。

私はそれからまたコップを重ねて行った。或いは金が足りないとも思ったが、足りないときはそのときだと思った。そんなことは気にならなかった。何もかもむなしかった。軍隊に行っていた六年の空白が私に重く今のしかかって来た。すべての昏迷はそこから始まっていると思った。先生の心持も私には判っているようで何ひとつ判らなかった。先生のことだけではなく、何もかも自分の心ですら私には判らなかった。ただ花子と始めて逢ったときに見た焼跡の巨大な虹のことを思い浮べていた。七色に輝きわたり、それは奇怪な夢のように非現実的な美しさであった。針のように鋭く焼け細った電柱の下から、魚眼のように瞳の離れた花子の顔が、淡青の夕空を背景にして迫って来たのだ。酔い痴れた頭の中で私は全生活をなげうってもあの美しさを捕えなかった。あんな壮大な虹でさえ五分も経てば跡かたも無くなるように、花子のあの美しさも男達を知って行けば束の間に頽れて行くに違いなかった。私は溺れて行けるものがほしかつたのだ。それが幻のように虚妄なものであっても私は溺れてしまいたかった。そして溺れ沈んで行くところから、も一度始めてみたかったのだ。私は肱をつき軀を卓にもたせながら、意味の無い饒舌をおやじと交していた。

「おやじ。俺をこの店で雇って呉れ」

どうせ闇物資を集めて商売しているのだから、それを集める係りになってやるから歩合を寄越せ、と半ば本気で私はしつこくおやじに食いさがっているうちに、その後のことは茫として記憶がなくなった。丹吉を何時出たのか判らないが、私は冷たい雨に全身を打たれながら暗い街をさまよいるような気がする。花子の名などを連呼しながら歩いたような気がするが、それも定かでない。眼が覚めたら外套を着たまま私は自分の部屋の寝床に寝ていた。

翻訳原書を紛失しはしなかったかと、そのことがしびれたような頭に先ず来て、あわてて私は起き上り身体を探った。内ポケットの中にそれは曲って入っていた。一先ず安心ではあったが有金は殆ど無くして、小額の紙幣が三四枚外套のポケットに入っているきりであった。丹吉への払いも足りなかったのかも知れないと思った。

井戸端で顔を洗っていると、貫さんも起きてやって来た。貫さんの口から白い歯磨粉がはらはらと散った。

「どうしたね。昨夜はずいぶん酔ってたようだが」

「御馳走になったんだよ」と私は嘘をついた。そしてそのことで直ぐ不快になった。貫さんにも金を借りたり世話になったりしているから、自分の金で飲んだなどとは言えなかったのだ。顔を洗い終ると貫さんは今から小田原に蜜柑を買いに行くのだと言った。

「どうだね。一緒に行かないかね」

何気なく貫さんが言った言葉だけれど、何か強く私の気持を引いた。すがるように私は返事していた。

「蜜柑をどの位背負うんだね」

「さあ、十貫目位かな」貫さんは私の身体を計るように上から下へ眺めながら、「大体そんなもんだな」

「捌くルートはあるのかい」

「そりゃあるさ」明るく笑いながら、「しかし君は止したがいいな。金は儲かるけれどこんな仕事はやるもんじゃない」

身仕度して貫さんが出かけるとき、私が玄関に立っていたら貫さんは懐から大きな紙幣を出して私の手に握らせた。

「いいんだよ、そんなこと」と私は拒みながらも、自分の顔が硬ばってくるのを感じた。そして押しつけられるまま、それを受取ってしまった。

風邪を引いたらしく鼻の奥が痛かった。昨夜の雨は止んでいたが、鉛色の雲が低く垂れていて部屋は暗かった。午後になっても天気ははっきりしなかった。洋傘は無いから出かけるのは止そうかと思ったが、暗い部屋にじっとしているのは厭で、私は原書を持って玄関を出て行った。

灰色の空の下に押し潰されたような巷から巷へ私はあてもなく歩いていった。そのうちに自然にサーカスのある一郭の方に足が向いていた。此の間のように、サーカスのところで偶然花子に逢うことを、私は知らず知らずのうちに予期しているのではないか。此のことが私を少し狼狽させた。花子に逢ってどうしようというのだろう。逢ってもまたすぐ別れるだけに過ぎない。花子に逢っても私は救われはしない。

広い道を青色の頑丈なトラックが何台もつづけて通った。トラックには沢山人が乗っていて、揺れるたびに楽しそうに笑いさざめいていた。あれは何処かの使役に従事する人夫である。笑いながら行人に掌を振り、そして次々遠ざかって行った。皆健康そうに見えた。そのことが痛く私の胸に響いて来た。私はうなだれて歩きながら、歩を先生の家に向けた。

玄関に立つと暫くして奥さんが出て来た。

「いないんですよ、先刻ひとりで出かけたんです」

暗い玄関に斜にすわって、奥さんは妖しく光る眼で私を睨むようにした。

「それじゃ丹吉かも知れない」

「丹吉というのは何です？」

黒天鷲絨の洋服の裾が畳に触れてさやさと鳴った。奥さんは立て膝になって、障子の棧につかまり身体を前ににじった。私は外套のポケットから原書を取り出した。しんみりと言った。

「これをお返しにあがったのです」

奥さんはそれを受取るうとはせず、じつと私の顔を見つめた。半顔が醜くひきつれて、その癖少し開いた頸から胸にかけては嘘のように滑らかだった。ガスマスクをかけたようだ。その残酷な聯想をいそいで断ち切ると、私は原書を上り框のはしに置いた。

「失礼致します。暫く来れないかも知れませんが先生によろしく」

咽喉に魚の鱗が貼りついたようで、言葉がうまく出なかった。お辞儀をして表に飛び出した。

焼跡を歩きながら、私は何故となく先生は不幸だと思った。私も不幸だけれど、私の不幸

は身体を一廻転ころがしさえすれば消えてなくなるようなものに違いない気がした。先生は墓穴に入るまで營々と何物かを引きずって行かねばならぬのであろう。あの女に花子という名をつけたのは先生である。昔知合いであった女に似ているんだと先生は言ったが、或いはその女の名が花子では無かったのか。知合いというの何かぼやけている。先生が今不幸であるとするれば、その因のひとつが其処らにあるのかも知れない。

風が少し立ちそめて、鉛色に低く垂れ下った雲がねじくられて北の方に動いて行く。錆びついた水道栓や崩れた石燈籠を見ながら行くと、道が曲る処のある廃電柱の下にぼんやり立っている人影が眼に映じて来た。何か予感めいたものに打たれて思わず足を早めて近づくと、うなだれていた人影は突然頭を上げた。それは奇妙な程的中した予感であった。電柱に背をもたせて首を反らしたその女は、紛れもなく花子だった。その顔はびっくりする程蒼白い瘵に、唇はどぎつく真紅であった。

「ああ、あなたなのね」

細くかすれた声であった。花子の瞳は不安気にちらちらと動いたが、私は喜びが俄に湧き上って来るのを感じた。

「今日は何だか君に逢えるかと思っていただけだ」

「あなたも風邪を引いているのね」暫くして花子が言った。そう言えば花子は咽喉に白い布を巻いていた。

「此処で何をしているんだね」

「通る人を待ってるのよ」

そう言いながら花子は幽かにあえいだ。何だかひどく苦しそうだった。まつ毛を伏せて私に背を向けようとする風情だった。私は片手を花子の肩に置いた。

「こんな処にいると風邪はますますひどくなるよ。丹吉に行つてあたたかいものでも食べよう」

花子は肩に置かれた私の手から逃れようとするような身体のかなしを見せたが、思い直したように顔を私に向け、子供のように稚なく素直にうなずいた。そして私達は歩き出した。風が正面から吹いて来るので、やがてジントラの旋律が乱れながら聞えて来た。丹吉に行けば先生がいるかも知れないということが意識にひらめいたが、それがどんな意味を持つのか判らなかつた。会えば翻譯のことわりを言わねばならないと思つた。花子と手を触れ合つたまま、丹吉の前まで来た。油障子の破れからのぞくと果して先生の半白の頭が見えた。何故か判らないが私はそのときほっとした感じを持つたことを記憶している。

油障子を引きあげる音に先生は振返つたが、私を認めてあの柔かい眼でわらいかけた。「君か。よく来たな。おやや」

私の後から入つた花子に先生の視線は固定して動かなかつた。

同じ卓について私も焼酎のコップをしきりに傾けた。昨夜の酔いが戻つて来るのか、廻りが極めて早いように思われた。花子も黙つて焼酎を飲んだ。蒼かつた顔に赤味がさして来るのがほのぼのと美しかつた。先生が言つた。

「昨日君は、僕の善意は悪意と同じだといつたな。あれはどういう意味なんだ」

「それはですね、先生」私は酔いが心を大胆にするのを感じながら、「悪意だとは言いませ

んよ。ただ無責任な感じがすると言っただけです」

「責任は持っているよ。しかし善意というものはもともと無責任なものだ」

「例えば、先生はこのひとに――」私は花子に一寸顔を向けた。「洋傘をやったでしょう。ところが洋傘をやったからといって此のひとは幸福にはなれなかった――」

「そうだ、あれは君の洋傘だった」

「洋傘が惜しいんじゃないやしません。僕が残念なのは、先生は洋傘をやってしまったって、もう安心している。何にも傷ついていない。先生。本当の善意というものは、それを行使する人は必ず傷ついたり、又は犠牲を払ったりするものじゃないでしょうか？」

先生は少しわらった。

「僕はだね、雨に濡れた弱そうな娘さんがいる。そして此処には洋傘がある。僕が持つより此の娘さんが持つべきだと思っただけには、ためらうことなく洋傘を渡すべきだと自分に言い聞かせるんだ。それだけでいいじゃないか。ひねって考えちゃいけない」

「しかし――洋傘を要らないときには、それはどうなるんです」

「それは貰う方で断ればいいんだ。簡単だよ」

「先生」と私は呼びかけた。「私は先生の好意はほんとに有難いと思うんです。けれどあの翻訳の仕事をつづけて行くことは何か辛抱出来ないのです」

「ではどうして生活して行くんだね」先生の言い方は急に沈んだように思われた。

「何でもやろうと思っっているんです」

「――闇でもやるかね」

「闇屋にはなりません」私は胸がつかまって来るのを感じながら、そのとき、先刻、曇天の街をタイヤの音を響かせて疾走して行ったトラックの人々の姿が突然胸に浮び上って来たのである。

「私は力仕事でも何でもやります。自分の力で食って行ける生活をやります」

「今だって自分の力で食っているじゃないか。君には力仕事は向かないよ。きつと又僕の処に戻って来るよ」

私は臉が熱くなるような気がした。先生はコップを傾けてこくこくと飲んだ。くずれそうになる意識を鞭打ちながら、私が更に言葉をつごとしたとき風が油障子に当るのか、がたがたと鳴り、そしてそれは鳴り止まず、かぼそく軋みながら五寸程引きあげられた。黒い人の姿が夕暮を背にして影のように立った。お客かと私が目を凝らしかけたたん、その人影は冷たい声で叫んだ。

「あなた！」

先生は直ぐ声に応じるように首を振りむけた。入口に立ったのは先生の奥さんだった。

「あなた。まだ飲んでいらっしやるの？　まだお帰りにならないの」

「もう暫くしたら帰る」

奥さんは店の内をずっと見廻す風だった。身体を硬くして私は卓の上のコップを握っていた。

「ああ、あの女もいるのね。そのひとは誰？」

「僕の知合いだよ」と先生は落着いた声で言った。

「あなたはその人に花子という名前をつけてやったのね。此の間その人が来たとき聞いたわ」

先生は黙っていた。

「似ているわ」奥さんの声は少しずつ高くなって行った。「似てるわ。ほんとに花子さんに似てるわ。そっくりだわ」

そして奥さんは甲高い声で笑い出した。

「お前はお帰り。僕もすぐ戻る」

先生のそういう言葉を聞いたのか、奥さんの姿は突然のように外に消えた。そして発作的な笑い声そのまま続きながら遠ざかった。先生は卓に向きなおった。コップを持つ指がぶるぶると慄えた。私は痛いような気持で、全身の神経を横にいる花子に集めていた。奥さんの笑い声が聞えなくなっても、花子は慄えが止まなかった。そして立ち上った。顔の色は水に濡れたような不思議な艶でひかっていた。卓を二三歩離れ、花子は眇すがめのように瞳を寄せた。

「私はお別れするわ」低いしゃがれた声で言った。「やはりお別れするわ。でもあなた方は良い人ね。きつと良い人ね。一生忘れないわ。先生。奥様におわびしといてね。私がきつと悪かったんだわ」

「君は悪くない」と私は思わず叫んだ。

先生は黙然としてコップを口に運んだ。眼を閉じているので、眼窩がんかが急に落ち窪んだ感じであった。コップを卓に置き、そして眼を開いた。懐に手を入れて紙幣を四五枚掴み出した。「君は悪いんじゃないよ。誰も悪い人はいやしない。ここにこれだけある。これを持って行き。真面目な生き方をするんだよ。口紅など濃くつけちゃ駄目だよ」

花子は片手をあげて唇をかくした。そして先生が差出した紙幣に迷ったような視線を落した。花子は僅か身体を悶えるように動かししたが、すぐ手を伸ばして紙幣をつかんだ。その指の爪が黒く汚れて伸びているのを私は見た。

「貰つとこつと」

急に荒んだぞんざいな調子で花子は言った。そして私に視線をちらつとうつすと、そのまま土間を踏んであげ放たれた油障子から出て行った。私を見たときの眼は燃えるように烈しかった。私はじつと堪え、椅子から動かなかった。急に四辺がしんと静かになった。私も黙ってコップを取り上げた。胸に動悸が烈しかった。強い液体が咽喉のどをすべり落ちる。沈黙が堪え難かった。それを埋めるために、私は頭に浮んだ事象を脈絡なく捕えて言葉にしようとした。

「先生」と私は呼びかけた。「此の間のサーカス見たときですね。少女たちが皆一所懸命やっていたでしょう。あれを眺めていて、ぼくは自分の現在が厭になつたんです」

「判っている、判っている」

先生は大きくうなずいたが、私の言ったことは全然聞いていない様子だった。風の音が窓や表でした。何とか先生をいたわりたいという気持と、離れて行きたいという気持が入り乱れて、私が何か更にしゃべろうとしたとき、表からまた人影が蹠音もなく入って来て土間に立ったのだ。それは花子であった。私はぎよつとした。

花子は蠟ろうのように血の氣を失った頬に、ふしぎな美しい微笑を浮べていた。その瞳は大きく見開かれているにも拘らず何にも見ていないようだった。もつれるような足どりで卓の方に近づいて来た。

「これはいただけないのよ」ぼんやりした取り止めもない調子だった。「あたしはねえ、一緒に寝た人からはお金は貰うけれど、何もしないのにお情は頂かないわ」

花子の指から何枚かの紙幣が卓の上にはらはら落ちた。先生はうつむいたまま黙って焼酎を口に含んだ。その顔をじつと花子は眺めていたが、急にぎらぎら輝く眼になって、先生の身体によりそうように身体をぶつつけて来た。先生の身体は小さな椅子の上でふらふら揺れ、私の身体にも触れ響いて来た。

「先生」花子は烈しく口を開いた。「先生。私と一緒に行って、おねがい。私をどうにかして。私を救って。先生。先生」

先生はコップを卓に置くと濁った眼を上げた。そして掌で花子の肉体を押し戻すように支えた。

「どうにかするって、どうするんだ」

その声があまり苦しそうだったので、花子はぎよつとしたように先生から離れ、土間に立ちすくんだ。肩から腰への線が着付けの具合か妙に見すばらしく見えた。両手を下に垂れたまま、暫くして花子の顔に、冷たいあの謎のような微笑が泡に似て浮び上って来たのである。あのサーカスの銀線上の女が浮べた笑い方と全く同じだった。それは自分の意志に反して、強いられて嬌羞きょうしゆうに赴く瞬間の女の哀しい顔であった。湯のように生暖い涙が思わず私の臉のうらにあふれて来た。「やぶちゃん注…「嬌羞」女の艶めかしい恥じらい。」

「私の部屋に来て――」花子は大きくあえいだ。「私と一緒に寝て」

先生はふるえる指で眼鏡を押し上げた。花子の視線からしきりに眼を外そらしながら、「それは僕には出来ない。あんな女だけれど僕には女房なんだ。女房がいるのに僕はそんな真似はしない」

花子のあえぐような息遣いが烈しくなつて来たと思つたら急に両掌で顔一ぱいをおおつた。おおつたまま小走りに土間を駆け、油障子に身体をぶつつけた。障子はばさばさと音立てた。身体をはずにして花子はよろめきながら表に見えなくなった。風がひとしきりそこに吹きつけた。コップをぐつとあおると先生の指は伸びて卓の端に触れた。

「これで、君、新しく洋傘を買ひ給え」四五枚の紙幣が酒に濡れた台をすべって私の方に押しやられた。

「洋傘は要りません。雨が降ったら濡れて歩きます」

押し戻そうとする私の掌が先生の指にからまり、一二枚、卓から土間へ落ち散った。先生の指は小魚の腹のように慄えているのが判った。「やぶちゃん注…「一二枚」は行末で、読点を補った。」

「先生」私は胸が一ぱいになるような気がして思わず詰寄った。

「何故花子を救ってやらないのですか」

先生は大きく見開いた眼で私を見つめた。その眼は乾いたばさばさの眼だった。

「僕にはあの女を救う方法が判らない」

「先生。あなたは一緒に行かなかった。自分が不幸になるのが厭なんでしょう」

「君が——」射すくめるような強い眼付になって先生は大声を出した。「君が行って、一緒に寝てやり給え」

私は思わず立ち上っていた。その瞬間私のはつきり感じ取っていたことは、先生のあの放恣に見える善意ですらも、超え難い限界を持つていたことだった。そしてその限界を超えなければ、本当の幸福はあり得ないということであった。壁のこちらで足踏みしていることが、すべての人々の不幸の因であることであった。そのとき始めて私は、此の壁を乗り越え、たといそこが奈落であろうとも悔ゆることなく落ちて行く勇氣が、胸の中に湧き上って来るのを感じていた。私は手を伸ばして紙幣を掴んだ。酒に濡れて重かった。

「洋傘をかうんじゃありません。しかし此の金は頂いて置きます」

いいとも先生は言ったらしい。がそれを後に聞き流して私は歩き出した。酔いのせいか土間が靴の下でぐにゃぐにゃと柔かい気がした。罅しきを越えると薄明の道が拡がった。外套の裾を風がひるがえす。花子はきつとあの電柱の下に行ったに違いない。それは酔った私の心を掴んだ確信であった。熱くほてった顔の皮を吹き去る風の冷たさを次第に快よく感じながら、私は凸凹道を一步一步と段々走るように歩調を早めて行った。

「やぶちゃん後注…私は本作を梅崎春生が書くに当たって思い当たる幾つかの知られた作家の先行作品が素材として用いられている感を強く持つが、何より、その最も確信犯のアイロニカルなそれは——夏目漱石の「ころ」である——ことは疑いようがない。」